

大戦略を考える ——ビザンツ帝国を中心に

エドワード・ルトワック

全ての国家には、認識しようとなかろうと、大戦略が存在する。それが必至なのは、大戦略というものが、それぞれが「大戦略」を持つ他国の行く末を左右することをねらって、知識と説得力、現代の言葉で言えば情報と外交が、軍事的な強さとどの程度相互作用しているのかということの意味しているに過ぎないからである。

全ての国家には必ず大戦略が存在するが、全ての大戦略が同等という訳ではない。正確な情報によって説得と強制力がそれぞれうまく発揮され、利用可能な資源から最大の力を引き出すようそれらが相乗効果を得るよう組み合わせられてはじめて、一貫性と有効性を有する。誤った武力の行使によって説得の成果が失われる、あるいは中立国の反感を買い、敵国を利し、同盟国を失望させるような不器用な外交によって戦場で得がたい勝利が台無しになることで、一貫性が失われるということもしばしばである。

近年では「国家戦略」を公式に宣言することが新機軸となっており、そこでは「国益」や、国益を保護し増大させる手段、この二つの合理的な調整、少なくとも合理化された文言での調整を、定義するようにしている。しかしビザンツ帝国には近代的な意味でのこのような文書を策定する中央の計画幕僚というものは存在していなかった。ビザンツ帝国ではそのようなものを国家戦略とは呼んでいなかった。「ストラテジー」という用語は古代ギリシャ語やビザンツ・ギリシャ語で用いられない単なるギリシャ語風の言葉だったということはあったにせよ。しかしそれが明示的に述べられることはなかったとはいえ、彼らは確かに大戦略を持っていたのである（戦略とは非常に近代的なもので、実際は幾分あいまいな傾向があるが）、しかし確かにそれは何度も繰り返し応用されたので、我々はそのからビザンツ帝国の「オペレーショナル・コード」さえ抽出できるだろう。

まず、指導者のアイデンティティおよび戦略の性質、さらに正確に言えば、戦略の逆説的な論理という2つの項目が明確にされなければならない。

アイデンティティ

ビザンツ帝国の支配階級は、外交的でも軍事的でもない戦略的強み、すなわち心理的な強みによって、外部世界とその終わることのない危険に向き合っていた。その心理的

強みとは、彼らの三重のアイデンティティによる強力な道徳的自信であった。ビザンツ人はまず、現代人に容易に想像がつく以上に熱心なクリスチャンであり、特に教義においてはカルケドン派であった。次に、文化の点ではギリシャ的であり、異教徒のホメロスでも、不可知論者のトゥキュディデスでも、不遜な詩人たちでも喜んで受け入れていた。もっとも、ギリシャ人(Hellene)という語は異教徒を意味するので、長く避けられていた。最後に彼らは自らをローマイオイ(Romaioi、生存しているローマ人)と呼んでいたのだが、これは長く残るローマの制度の正当化ということもあるが、少なくとも象徴的な意味でローマ人であることに誇りを抱いていたということでもあるのだ。

しかし、イスラム教徒が帝国からレバント地方とエジプトを奪うまでは、この三重のアイデンティティが、コンスタンチノーブルの上流階級に対する地方の離反の原因になっていた。三つのなかで、ローマ人としてのアイデンティティだけが一般に受け入れられていたのである。

地図 13 番「525 年、1025 年、1360 年のビザンツ帝国」を挿入

シリアとエジプトの人口のほとんどを占めていた、西アラム語およびコプト語を話す人々は、自らの土地とその彼方にいたユダヤ人もその中に含めて、ビザンツ体制の一部となって異民族排斥論者から「ギリシャ化主義者(Hellenizer)」として攻撃されていた世俗のエリートを除いて、ギリシャ文化には参加しなかった。その他の人々については、大衆はホメロスがかつて生きていたことも知らなかったし、無学な狂信的僧侶に容易に誘導されて、無知ゆえに楽しむことができないものを激しく嫌っていた。

さらに、このヘレニズムを拒絶した地域は、ローマ人の入浴の習慣をふしだらとして拒絶したのと同様、カルケドン派教会のキリストに人性と神性の二つの本性を認める教義を過度に知的だとして拒否し、キリストには神性という一つの本性しかないという純粹に単性論的な概念を主張していた。

これは、エジプトとシリアのコプト正教会、エチオピアとエリトリアの正教会、インドのヤコブ派正教会とマランカラ正教会、さらに微妙な差異のあるアルメニア使徒教会が依然として信仰しているキリスト単性論の教義である。全キリスト教会の合同一致が目指されている現代においては、東方正教会はもはやカルケドン公会議での論争における自らの立場にそれほどこだわっていないが、6 世紀から 7 世紀にかけてのビザンツ帝国では、一方でカルケドン派による迫害があり、他方で単性論教会の熱狂があり、皇帝ヘラクレイオスの単勢力論や単意論による教義の妥協を目指した試みはことごとく拒否され、帝国は分裂の危険に曝されていた。

しかし、こうした争いがあったとしても、非キリスト教徒と対峙する帝国のために戦おうとする単性論派教会信者の意志を消すものは何もないはずだったが、実際にはあったし、それには十分な理由があった。帝国を攻撃していた非キリスト教徒はその主義の上で反キリスト教だったわけではなく、特に、ブルガール人、マジャール人、キエフのルス人、セルビア人、およびクロアチア人など異教徒の敵の中にはキリスト教に改宗した者も多かった。他方、教義の中に反キリスト教主義を含むイスラム教は、ユダヤ教と同様にカルケドン派以上に純粋な一神教であったのだ。

イスラム教徒が帝国の最も熱心な反体制派の住む地域を奪い取ってくれたおかげで、帝国は根深い分裂を回避できた。実際、ビザンツ帝国では、その後でさえ言語の単一化すらまったく不可能であった。東部にはアルメニア語を話す人々が、西部にはスラブ語を話す民族があり、その間には遙か昔から存続している土着の言語、トラキア語やベシク語といった言語がテオドシウスの城壁が見える場所で使われ、僧侶の間に記録されていたのである。しかし、その中のどれも、ギリシャ文化を求める者がギリシャ文化に参加する妨げにはならず、こうした原言語の相違が教義の狭間で不和を加速したということもなかったのである。そうすると、シリアとエジプトの喪失は、ラテン語を話しカルケドン派の信仰を持っていた北アフリカの場合と違い、帝国にとっては二重の祝福であった。それにより宗教上の調和という神の恵みを得られたし、文化的統一も促進されたのである。

イスラム教徒の征服によって、ほんのわずかの不運がきっかけとなって一気に崩壊する可能性がある巨大だが統一されていない帝国のかわりに、より小さく貧しいが、より統一され、その後6世紀にわたる戦乱に上手く耐えて鍛えられた帝国が残されたのである（ビザンツの行った戦争を説明するのに十字軍という言葉を使うのが侮辱にはあたらないということには十分な理由がある。しかも、『De Velitatione』（訳注：書名）の記述の通り、特に辺境地帯では聖戦としての側面を持っていた）。

これがまた、深刻な危機のときや苦痛なほど長く続いた極端に不安定な時代にも、帝国支配階級が巨大な回復力を持っていたことの説明にもなる。全てが破綻し絶望的に見えるときでも、キリスト教徒としての信仰、古代ギリシャの文化、そしてローマ人としての誇りが一体となって、降伏を拒否し不屈の精神を鼓舞するものとなったのである。

戦略の論理

「戦略（strategy）」は、ギリシャ人は知らなかったのだが、ギリシャ語の strategos をもとに西洋世界全体に「strategy（strategie、strategia など）」として広がっていった語である。この strategos はしばしば「将軍」という意味に誤解されているが、歴史的事実と

して軍事政治両方の指導者を指しており、したがって、同様に幅広い活動の語源にふさわしい。戦略の論理はそれほどひどく単純ではない。

「人間は[相反するものの一致]を理解できない。弓におけるような『逆に向き合った調和』というものがあるのだ。ヘラクレイトスあるいはエフェソスのヘラクリトスは、その時代においては非常に目立たないと見なされていたが、核抑止論のパラドックスを経験した我々現代人にとっては非常に分かりやすい。核抑止論においては、平和時にいて常に報復攻撃の準備を整えておかなければならず、攻撃側は意気地なく用心深くなければならない。そして、核兵器は使われないときにのみ有用なのである。核抑止論は明らかに矛盾を含んでおり、安全が恐怖から生まれた頑健な子供でもあり得るということを理解できないほどどうしようもなく純真な人間以外の誰にとっても、戦略の逆説的論理、正反対のものを一つの場所に一体化する「逆に向き合った」関係として現れ出ている。

この核抑止論からすれば、西洋において最初に戦略的考察を行ったヘラクレイトス（「戦争は誰にとっても父であり王である。だから、戦争は一部を神々に捧げ、残りを人に与え、一部を奴隷にし残りを解放する」）の正しさが、結局は証明されたことになる。もっとも、彼の時代よりも遙か以前の狡猾な戦士たちは、敵に奇襲をかけるために逆説的論理、すなわち、よりよいが、それゆえに当然予測できる戦闘方法を意図的に捨てる場合にのみ可能となるようなことを本能的に利用して勝利を収めてきたということはある。敵の反撃がある場合は、最もまっすぐで広く最良の舗装が施された最良の攻撃路が最悪のものになる。というのは、その道は最良の道である一方で、反撃してくる敵にも最良の道になり得るからである。まさにその意味で、進撃している軍が勝利を収めても、ひとたびその軍が成功の頂点を極めてしまえば、敗北を喫することがあるということも、動的な行動とそれに対する反撃に関する同様の理論で説明できる。まさに、勝利は、過剰拡大という単調な作業によって敗北に変わることがあるのだ。同様に、戦争そのものも、兵力が使い果たされ継戦意欲が失われれば、平和に道を譲ることがある。

まさに、戦争という大試練にあたって作りあげられ形になったものは、結局その逆のものに変わってしまい、それが十分長く続く場合のみ、ニコラ・デ・クサまたはニコラス・フォン・クエスの「相反するものの一致 (coincidentia oppositorum)」の動的なバージョンになるといえる。この論理の哲学的意味を捉えようと努力する必要はないし、実際に適用するためにその存在を知る必要もない。しかし、この論理に従うことなしに、ローマ人がしたように戦争の中で帝国を建設できた者も、東ローマ人のように何世紀にもわたって帝国を維持できた者もないのである。それは、単純で静的な矛盾律「シ・ヴィス・パセム・ベラム (si vis pacem para bellum、平和を求めるのなら戦争に備えよ)」に始まり、動的な矛盾律「包囲された陣内の足元全てを守っているのなら、すでに陣地

を守っていない」や「あまりにも完全に勝ちすぎて敵を潰滅させてしまうと、新たな敵を生むことになる」などなど、である。

もう一つ付け加えておくべきこの点に関する複雑さとは、紛争がさまざまなレベル—大戦略レベル、戦域戦略レベル、作戦レベル、戦術レベル—で展開しているということ、これは下から上よりも上から下へという方向で浸透しやすい。現代から例を取れば、アドルフ・ヒトラーが大戦略のレベルで間違った国を同盟国に選び、間違った国を敵とした—イタリアおよび日本と同盟し、アメリカ、ロシア、および大英帝国を敵に回した—ことは、ドイツの戦術的、作戦的、さらに戦域レベルでの数々の勝利、特に 1940 年にフランスを蹂躪したことによっても、乗り越えることはできなかったし、さらに大きな戦場での勝利も最終的な結果を変えることはできなかった。仮にノルマンディー上陸作戦の撃退に成功していたとしても、ドイツはやはり戦争に敗れていたろう。最初の原子爆弾の目標が広島ではなくベルリンになっただけのことだ。さらに、原子爆弾がなかったとしても、アメリカ、ロシア、および大英帝国は、数年余分にかかったかもしれないが、戦争には勝ったであろう。戦術の冴え、巧妙な作戦、さらに戦域レベルの勝利でさえ、大戦略の失敗を埋め合わせることはできないが、一方、逆に首尾一貫した大戦略があれば、戦域戦略、作戦方法、および戦術に関しては単に妥当であればよい。

圧倒的な優位、物資、または士気あるいはどんなものであれそれらの組合せを与えられれば、戦略が必要なくても、戦争に勝つことができるし平和を維持することもできる。重要な反撃ができないくらいに弱い敵は、實際上単なる目標である。戦争には、距離、地形等々からくる大きな困難が依然として存在しているが、物理的な問題を乗り越えるために逆説的論理が求められるわけではなく、しっかりした常識と機能的手順に従う「直線的な」論理が求められるのである。

そのようなわけで、見込みの薄い戦いに挑む者、数的に圧倒されている者、包囲されている者、および野望が大きすぎる賭博師が、この逆説的論理を利用しようとし、結果についてはリスクを負い—しばしば資源につりあわない勝利をおさめ、ときには屈辱的な崩壊を味わった。したがって、有名な戦略家—ナポレオンが最も有名—が結局失敗しているのも自然なことだ。ヘラクレイトスは我々が知るとおり成功したが、飾り気の無いペリサリウスは結局失敗した。しかし、ビザンツの指揮官たちのほとんどは、ヘラクレイトスもペリサリウスも尊敬しつつ、マニュアルに書かれた慎重な方法を好んだ。このマニュアルでは逆説的論理が利用されていたが、リスクを慎重に受け入れられる範囲内でのことだった。ここでは、ビザンツ人が、軍の兵力に頼るのはどうしても必要な範囲に限りつつ、あらゆる戦術的強みおよび作戦面の強みを最大化する必要でどれほど頭がいっぱいになっていたのかが分かる。

それぞれ限らない多様な形態を持つ大戦略は、コストがかかる軍勢力への依存度によって比較され、外交（「武装した説得」）、誘導（報酬、贈り物、名誉）および欺瞞と宣伝による潜在的な力の行使とは対のものとして位置づけられる。現実の兵力への依存が小さければ小さいほど、兵力の物質的なバランスを超え、少ない兵力で大きな成果を得る可能性が高くなる。ビザンツ人はこれに関しては多数の先駆者があり、おそらく卓絶した達人になり、その地位を維持していた。アレキサンダー大王は、その向こう見ずなインド侵攻からの帰途の陣中で死亡する前、すでに、ギリシャ以外の唯一の大国アケメネス朝ペルシアの征服によって千年王国にふさわしい栄光を得ていた。アレキサンダーの大戦略は、間違いなく逆説的論理に立脚していた。彼の戦術が「猛烈な」もの - 重装歩兵による正面攻撃と騎兵による一か八かの突撃 - であったのに対して、彼の外交はアケメネス朝の総督やその臣下に対して勝利を収めるためにマケドニア人とイラン人の結婚を奨励したことに象徴される「柔らかない」包み込むようなものであった。合意による帝国という自分の発案をインドにまで拡張しようとした試みが、依然として元のマケドニア軍を基幹としていたがすでにマケドニア兵の存在が希薄になっていた軍には荷が重すぎ、大王の成功の頂点を越えさせてしまったのだった。

ここまで見てきたように、我々がビザンツ帝国と呼んでいる東ローマ帝国は、特にユスティニアヌス帝の帝国領回復の試み以降、その戦略においてはほとんどローマ的ではなかった。ササン朝ペルシア、イスラム教アラブ、および最終的にはセルジューク朝トルコとオスマン朝トルコによる東方からの脅威、フン族、アパール人、ブルガール人、ペチェンガ人、マジャール人、およびクマン人といった北方のステップからの脅威、さらに西方からの脅威に連続してさらされ、ビザンツ帝国は9世紀まで、古典的なローマのやり方では攻め寄せてくる敵をすべて圧倒し撃滅することは望めなかったのである。

自軍、特に費用がかかる騎兵を目前の敵を撃滅するために消耗させてしまえば、続く第二波の侵入者に道を開放してやるようなものであった。ビザンツ帝国の大戦略の真髄は、外交、欺瞞、賄賂、および改宗といった手段で外敵を互いに戦わせ、帝国には向かってこないようにした点にある。唯一正しい信仰を守るただ一つ存在というビザンツ人の強い自己イメージによって、彼らは道徳的な平静を保つことができた。ビザンツ帝国の枠組みでは、軍勢力は通常とは異なって外交の下位に置かれ、全軍で攻撃に出たり防御したりするのではなく、主に阻止、懲罰的行動、または威圧に使用されたのである。

ビザンツ帝国の「オペレーショナル・コード」

こうしなさい、こうしてはいけない、というきびきびとした命令や、あるいは叔父がするような忠告、つまり第三者が物事を勧める時に使う言葉よりも煩わしくない言い方が求められるような助言であれ、こうした形態の「方法論」と呼ばれるものを伝達していなかったということが、ビザンツ帝国の魅力的な慣習だった。そして、それは筆者が下記においてビザンツ帝国の戦略文化の本質的な規範を最大限に簡潔に明らかにするために用いた体裁である。ビザンツ帝国のどのような文献をあたっても下記のもののほど包括的に述べられているものはないが、ここで検討しているビザンツ帝国のガイドブックやフィールドマニュアルにあった様々な勧告に似たようなものとして、観察された行動に適切に依拠することは可能であろう。重複を最小限にする基準となる要約を作ることが、オペレーショナル・コードを明らかにするための一つの方法である。

I. あらゆる状況下で可能な限りの手段を用いて戦争を回避する。ただし、いつでも発生可能性があるかのように行動する。個々の新兵および部隊全体を徹底的に訓練する。演習で部隊同士を対抗させる。いかなるときでも使えるように、武器と補給品の準備を整えておく。—ただし、戦いを熱望してはならない。

最高度の戦闘準備をしておく目的の最たるものは、まったく戦わないで済む可能性を高めることである。

II. 敵と敵の考え方についての情報を収集し、その動静を継続的に監視する。軽騎兵隊による巡察および偵察は常に必要であるが、これで十分ということはない。戦争の脅威の早期警報を出す、あるいは少なくとも敵の戦争準備に関する報告を行う、さらに敵の意図の推測を助けるといった目的のために敵地にスパイを放つことが必要である。戦闘部隊による偵察と非戦闘員の情報員による情報活動の間にあたる情報収集の中間層としてしばしば極めて有用なのが、隠密(=事実上隠れた)偵察、つまり受動的観察と報告である。偵察活動と敵の偵察の妨害の努力が無駄になることは減多にない。

III. 攻撃においても防御においても作戦活動は活発に行う。ただし、ほとんどの攻撃は小部隊で行う。全力攻撃よりも斥候、襲撃、および小規模戦闘を強化する。特別に好ましい状況下を除いて、戦闘、特に大規模戦闘は回避する。そして、そのような好ましい状況であってさえ、例えば敵艦隊が嵐でひどく損害を被っている場合など、敵が何らかの理由で完全に劣った状態になっている場合以外は、可能な限り戦闘は避けること。

IV. 戦闘による損耗を避け、策略による「不戦勝」を目指す。防御においては、大きく優勢な敵軍とは対峙せず、侵入軍に近いがちょうど攻撃されない程度の距離を保ち、数

的に味方よりも劣勢な分遣隊、輸送隊、および徴発隊を発見した場合は襲いかかる。敵軍の経路に大小の待ち伏せを準備し、見せかけの退却で敵軍を罠に誘導する。攻撃の際は、襲撃するか、よりよいのは、強い抵抗にあったら即座に退却するような探りを入れる攻撃である。作戦行動の各々が小規模なものであっても、休みなく行動を続けられれば、時とともに敵の士気と物質的な力が低下していく。

V. バランス・オブ・パワー全体を変化させるために同盟国を募ることで、戦争を有利に終結させるよう努力する。したがって、外交の重要性は平時よりも戦時の方が高い。ビザンツ帝国には、大砲が撃たれれば外交官は黙り込む、などという愚かな格言はない。敵を攻撃するための同盟国を募るのなら、敵の同盟国が最適である。なぜなら敵の近隣国で敵軍との戦い方を心得ているからである。敵の司令官を上手く墮落させて帝国の利益のために働かせることができれば、よい同盟軍にさえなるであろう。何よりも有効なのは敵の宮廷内あるいは王族の中に内通者を置いた場合である。しかし、たとえ些細な助力しか提供できない周辺的な同盟国であっても、可能な限り同盟に引き入れるべきである。

VI. 国家の転覆が勝利への最善の道である。これは戦闘の代価と危険に比べれば非常に負担が軽いので、どんな場合でも、たとえ敵意や宗教的情熱を吹き込まれた最も将来性の低い標的であっても試みなければならない。切迫したジハード（聖戦）の攻撃に直面した場合も、この戦略では、辺境の城にいるアミール（地方総督）に「贈り物の籠」を贈り、友好関係を結ぶよう助言している。既知の狂信者に対しては例外を設けてはならない。10世紀までに、ビザンツ帝国は、宗教的狂信者も賄賂を受け取るし、ときとして非常に容易に受け取らせることができるということを確かな知識として発見していた。彼らは、賄賂を受け取ることの宗教的正当化を作り出すのもうまかった（例：「いずれにせよ、イスラムの最終的勝利は避けられないのだ」）。

VII. 外交と国家転覆が不十分で戦闘が不可避である場合、はっきりした敵主力部隊を回避し、敵の弱点を探す「合理的な」作戦方法および戦術を実行しなければならない。主要な戦闘部隊の消耗を避けるために、敵の士気を低下させ物資を消耗させる努力を忍耐強く続ける必要がある。それには長い時間を要することがあるが、急ぐ必要はない。一つの敵国が減びても、間違いなく別の敵が取って代わるだろうからだ。あらゆる支配者はつねに交代し、国家は興っては滅びてゆく。ひとり我が帝国だけが永遠に存続するのだ。

注：ここで概要を述べたオペレーショナル・コードについて、歴史的評価は考慮に入れていない。最初に述べたように、「ビザンツ帝国の戦略」という名でここに構成したのは、5世紀にその時点の特定の状況に対する反応として考えられたものであるが、筆者は、続く数世紀の間の非常に異なった状況の痕跡がビザンツ帝国の戦略の中に残っていることを認識している。結局のところ、ビザンツ人は我々と同様経験から学んでいるのだ。同じ過ちを2度、3度、4度と繰り返すが、そこまで来ればもう次は同じ過ちは滅多に犯さなかった。あるいは、どのような頻度であれ同じような方法ではやらなかった。現在提唱されている、「オペレーショナル・コード」を定義するに十分な一貫性があるという主張は弱々しいものであり、それゆえに、続く8世紀間（訳注：5世紀から13世紀）を全体的に考えれば、筆者の主張が優れた先達のそれと合致することが再確認できるのである。